

初回現場実習が将来の進路選択へ及ぼす影響についての考察

中 村 卓 治

Initial training site for a future career choice to examine the effects of

Takuji Nakamura

共同研究員（中村ゼミ6期生）

川尻 早織・神崎 愛美・田澤志穂美・野原ゆきみ

弘中万恵子・福井真理恵・矢次 純子・横山真紀子



キーワード

社会福祉現場実習、振り返り（フィードバック）、かかわり、福祉専門職、自己覚知

アブストラクト

本学において人間福祉学を学ぶ上で大きな存在となる社会福祉現場実習。特に初回実習においては、座学を中心に学習を行ってきた学生たちにとって非常に大きなインパクトを持つ体験となるはずである。その経験が将来の進路選択にどのような影響を与えたのか、どのような意味を持つ体験だったのかについて、中村ゼミ6期生による調査実践活動を通して考察する。

I 序 論

I は じ め に

筆者の専門演習Ⅱ（以下、「ゼミ」とする）では、ゼミ生達の一番関心のあるテーマについて調査実践活動を行うことにしている。

今回もブレインストーミング法やKJ法を活用しながら、2ヶ月余りの間研究テーマを模索し続け、結果キーワードとして挙がってきたもの

が、「将来への進路（就職）」と「社会福祉現場実習（以下、現場実習とする）」についてであった。丁度本活動の時期が3年次ということもあり、就職ガイダンスが開始され、初めての現場実習の実施を目前に控えていたこととも重なり、意識せざるを得ないテーマであったのかもしれない。

このキーワードに対するゼミ生達の動機は、実習終了後にいっそうの高まりをみせ、「他の同

級生たちが初回の現場実習をどのように評価し、将来への見極めの題材としてどのように現場実習での経験を活用しようとしているのか」といったことについて「知りたい・調べたい」という意欲を強めていったのである。

こうして、中村ゼミ6期生は、「初回現場実習が将来の進路選択へ及ぼす影響」について、アンケート調査やグループディスカッションを活用しながら明らかにしていく活動を、3年次後期より具体化させていくことを決定したのである。

2 研究の目的

関心のある福祉現場で、自らがめざす職種の理解を図るために実習を行う体験は、どのような事後評価とともに、その後の進路（就職）選択にどのような影響をおよぼすのであろうか。初めての体験ということで良いも悪いも非常に大きなインパクトを持つ初回現場実習に焦点を当て、学生が現場実習を体験することの意義と将来の進路選択への影響について考察を行う。

3 研究の方法と作業の流れ

まず初回現場実習を体験した直後の本学科3年次生に対し、現場実習に関するアンケート調査を同時期に一斉に実施する。

次にそのアンケートの集計結果から抽出されたキーワードを整理し、その資料とゼミ生達の現場実習体験を基にして、「初回現場実習が学生たちにどのような影響を与えたのか」についてグループディスカッションを行い理解を深める。

II 本 論

本章では、ゼミ生たちによる調査活動の概要及び調査結果について報告を行うこととする。グループディスカッションはそのまま口語体にて表現する。

1 アンケート調査と集計結果

(1) アンケート調査の実施概要

本アンケート調査は「社会福祉援助技術現場実習または精神保健福祉援助実習が将来の進路に与える考察」について、人間福祉学科3年次生80名に対して、2007年9月21日（金曜日）に一斉に実施した。全対象者に対する回収率は96%であった。

(2) 集計結果

1) 基礎項目について

全員が何らかの国家資格を取得しようと考えている。社会福祉士の資格を取得予定の者が最も多く、87%であった。精神保健福祉士の資格を取得予定の者は37%。内、両資格を取得予定の者は約17%であった。

初回現場実習を実施するまでに考えていた将来の進路としては、福祉・医療領域（保育領域を含む）を考えていた者が一番多く66%、将来の進路の方向性が決まっていなかった者は27%であった。

ところが、初回現場実習を行った後での就職希望状況では、福祉・医療領域（保育領域を含む）を就職先に考えている者は上記の回答よりも約20%も減り、48%と全体の半分の割合を切ってしまった。どうするか迷っている者も39%となり、この結果から初回実習を経験することで、福祉・医療領域（保育領域を含む）を就職先にすることに迷いやあきらめが生じた者が増加していることが明らかとなった。

2) 実習現場の領域について

社会福祉援助技術現場実習の実習先では、「高齢者領域」の割合が38%と1番多く、「障害児・者領域」28%、「児童領域」が11%と続いている。また、精神保健福祉援助実習に臨んだ者の実習先は、「精神科病院」か「社会復帰施設」のいずれかである。

3) 領域選択の理由について

「以前から関心があり、実際の現場を知ってみたいかった」と答えた者が51人と最も多く、「友だちと一緒にの場所で実習したかった」と答えた者はいなかった。 ※参考資料 ■ 2-5)

4) 実習開始までの実習現場に選んだ領域に対するイメージについて

「どちらでもない」と答えた者が50%と最も多く、「マイナス的な心情」26%、「プラス的な心情」22%という状況であった。

※参考資料 ■ 2-6)

5) 初回現場実習の満足度について

「やや満足している」「やや不満である」といった中間の評価が大方を占めた結果となっている。 ※参考資料 ■ 3-7)

6) 5)で「不満である」者の理由について

実習先の環境的・外的要因よりも、学生自身の対応力や資質といった内的要因によるものが突出している。 ※参考資料 ■ 3-8)

7) 実習後の進路に関する考えの変化について

半数弱の者が、実習経験によって将来の進路に対する考えを変えている。

※参考資料 ■ 3-9)

8) 7)で「変化した」ものの方向性について

福祉職の中で他職種への変更を検討している者が40%、逆に福祉職に就職する方向で変更を検討する者も30%と、結果的には現場実習が福祉領域内での就職を決定付けるきっかけとなっている。 ※参考資料 ■ 3-10)

9) 7)の「変化した」要因について

福祉現場や希望職種の実際の状況を知り、関心の度合いが高く或いは低くなったことを表している。 ※参考資料 ■ 3-11)

10) 卒業後の進路について

福祉職への希望者が60%。まだ決めていない者も20%と意外に高率である。

※参考資料 ■ 3-12)

11) 将来の進路を決定する上で初回現場実習は参考になったかについて

ほぼ全員が参考になったと回答している。

※参考資料 ■ 3-13)

12) 初回現場実習は自分自身の人生において何らかの意味を持つ経験であったかについて

ほぼ全員が何らかの意味を感じている。

※参考資料 ■ 3-14)

2 アンケート調査結果を踏まえたグループディスカッション

(1) グループディスカッションの実施概要

まず、アンケート調査の結果をゼミ生たちで整理・分析したところ、2つのキーワードが抽出された。ひとつは「日常生活におけるまわりの出来事に対して問題意識をもてるようになったこと」、もうひとつは「福祉の領域に対するイメージがもちやすくなったこと」である。さらにその2つのキーワードの共通項を明らかにすると、「学生自身の変化・成長」という言葉に辿り着いた。もう少し丁寧な説明に置き換えると、「対象となる物事を一生懸命に理解しようとする」ことが、学生自らの変化や成長へつながるということである。このことに対する共通認識をメンバー内では持てたものの、この段階では抽象的すぎる感が否めず、第三者でも容易に理解できるような工夫の必要性が確認された。そこで、ゼミ生各々が初回現場実習を振り返ること、共通項を様々な角度から表現してみることを試みた。

ゼミ生の内1人は都合により現場実習を実施していないため、逆にその立場を利用して、経験して無い者がそのディスカッションの場に立ち会い、客観的な立場で感じた意見を述べてもらうことにした。

(2) グループディスカッションの内容

1) 現場実習体験による自己の変化・成長について

※()内は実習先種別。

メンバー A (精神科病院)

現場実習へ行って、自分自身が変化したと思うところがある。私は他人には「自分のことを

大切にしていね」とよく言うけれど、自分のことはどのように大切にしていけるか分からない。過去の体験とかを今でも引きずっていて、別に他人から私が大切にされなくても、自分も自分のことを大切にしないでいいのではないかなと思ってしまう。しかし「他人は大切にしていきたい」とずっと思ってきた。

今回の現場実習体験では、他人も含めて自分をわかったうえで、自分自身を大切にしていかなければいけないという気持ちが初めて芽生えた。それと、自分の主観も大切だけれども、一歩引いて周囲の状況を把握して判断することがすごく大切なことだと分かった。

メンバー B (身体障害者施設)

一番の大きな変化は、成人の福祉分野に就職しようかと思えたことだ。大学に入った頃からずっと子どもの分野しか考えてこなかった。けれど、子どもの分野で行きたかった実習先へ行くことができなかった。だから結果として選択した実習先は積極的に行きたかった分野ではなかったため、「まあいい経験かな」程度にしか考えずに現場実習を開始した。実習へ行ってみると、利用者さんはできないことは職員などに伝え、助けてもらいながら生活をしていた。生活ができるようにうまく他人に頼るとか、自分が生活しやすいように他人に頼ることをしていた。それと、「利用者だからといって援助されるだけじゃないのよ」と言われたときに、「ああそうか」と気づいた。

援助する立場ということについても考えさせられた。私はお茶などを配るときに、机に「ボン」って置いていたけれど、職員さんに「もっと利用者さんの障害のことを考えてみて」って言われ、更に「右側に麻痺があるか、左側に麻痺があるとかを考えて。持ちやすいところに置かないと持てないのよ」って言われた。学校では、そのようなことは「個人差があるので気をつけて」程度で流されていたものが、現場へ行くと、個人差とはどのようなものなのかが明

確になってきた。だから、「どう支援していいか」「何を援助するべきなのか」「どう支援していくか」とかが少しだけ分かってきた。とても細かいところにも、気を遣わなければならないということが分かった。

メンバー C (精神障害者社会復帰施設)

実習先では、私が行動をするたびに、職員から「何のためにこの作業するのか?」とか「意図は何?」と尋ねられた。「これこれがあったんです」と、フィードバックの時に考えを述べると、「じゃ、何のためにしたの?」とか「じゃ、それは何につながっているの?」とか、執拗に尋ねられ、とても困った。しかし次第に、「それを考えてないか専門職のかかわりではないのではないか」「自分のやっていることが何のためにやっていてどうつながっているのか分からないと、仕事としてやっているものではないのではないか」ということを強く感じるようになった。

実習が終わった後の自分の生活の中でも、自分がやることに対して、「何のためにやるのか」ということを考え、それを意識するようになった。それが一番大きいこと(成長)かなと思う。

メンバー D (精神障害者社会復帰施設)

利用者さんに相談された時にどう返していいかわからなくて、相談に対して、相槌を打つことしかできなくて、その相談に対して「そうですね、そのほうがいいですよ」って答えるのがいいのか、「それはちょっと違うので、別の方法がいいですよ」って答えるのがいいのかが分からなくて、「うんうん」と頷く事しかできなくて。それをフィードバックで話したら、私は2つしか浮かばなかったけれど、担当者の人は次から次に言葉が出てきた。

「否定ではなく、ただ相手の人の相談内容を繰り返すだけでもいい。『そのときあなたは相手の人にそう言われてどう思いましたか?』と利用者さんの気持ちを聴くことだけでも。自分の

思ったことを話すのではなく、『利用者さんはどうしたいのか、どう思ったのか』そういうことを聴くことも大切だよ』と職員さんに言われた。私はそういうことが全然できてなくて、座る位置、ポジション、距離などたくさんのことが利用者とかかわりには大切だということを学ばせてもらった。いつも椅子に座る時、向かい合って座るのが普通だと思っていたし、「自分のにも辛いな」と思いながらも、利用者さんと話している間はずっと目を見ていないといけないと思っていた。職員さんに、「それは利用者さんにも感じていること」と言われた。二人が辛いままでは話も盛り上がらないので、考えて座らなければならないことと、横に座ったほうが喋りやすいことも職員さんから教えていただいた。あとは「利用者さんが自分とかかわりから逃げないために」と、追い込むように座ってはいけないことも教えていただいた。「自分で逃げ道を塞いで、立てないようにしてはいけない」ということにも職員さんの話しの中で教えていただき、気づかされた。今まではそのようなことを考えずにただ話をしていた。それからはいくつかのことを意識しながら利用者さんとかかわるようになった。

担当者の方に言われて一番印象に残っている言葉は、「たくさんの引き出しを持つこと」で、「本当に大切だな」って思った。実習が終わって、普段の日常生活でも、友達から相談されたことや、普段の何気ない会話からでも色々な返し方があることに気づいて、ただ笑って「そうだね」と相槌を打つだけでなく、「こういう言葉も言えるのかな」と言葉を慎重に選ぶようになった。

このように、実習はとても自分自身にとって大きな影響を与えてくれたと思っている。

メンバー E（高齢者施設）

実習をするまでは、私は自分の進路や就職のことはあまり考えてこなかった。この大学で福祉の勉強をしているからそれを生かした職に就

かないといけない気持ちはあり、「福祉職に就いたほうがいだろう」と思っていた。

実習先では言葉の内容が聞き取りづらい利用者さんがいて、最初はその利用者さんとのコミュニケーションがうまくできない状態だった。積極的に話しかけに行く中で、少しずつだが利用者さんと自分の「気持ちのキャッチボール」ができるようになった。それがとても嬉しかったことが印象に残っている。実習体験で、利用者をはじめ、他者をよく見るできるようになった。そのことを生かせるような福祉職に就きたいと考えている。

メンバー F（精神科病院）

私は自分がマイナス思考だから、そういうところを主に意識して実習をしようと思った。実習に実際行ってみても、利用者さんに対して何もできないし、ただ話すことすらできなかった。でも、「話しをしよう」と言ってくださる利用者さんもしらっしゃった。その経験から考えたら、将来福祉職に就いて利用者さんを支えてあげようとしているけれど、福祉職という立場も利用者さんに支えられていると思った。

実習中はほぼ放置だったので、自分が行っていることが正しいかどうかがわからなくて、自分のやっていることを、「もっとあんなにいいよ」「こうしたらいいよ」とアドバイスがほしかった。利用者さんがいないと、自分の仕事もなくなるわけだし、自分に教えてくれる人ももっと減る。今回の実習で、福祉職も利用者さんどちらも互いを支えつつ成り立っていると感じた。

メンバー D（精神障害者社会復帰施設）

印象的だったのは、利用者が一人しかいない時があり、その日はずっとその方と一緒にいた。その方に長い間相談されたのに、その答えが出ないまま実習が終わった。自分が実習を終えて帰る時に、「ありがとう。あなたが話を聴いてくれてよかった。また話したいわ。」と声をかけ

てくださった。私はとても嬉しかったが、その反面、聴くことしかしていなくて十分な相談にはのれなかった。「何にもしてあげられなかった」と相手に悪い気持ちになり、複雑な気持ちだった。

メンバー A (精神科病院)

メンバー B が言ったように、当たり前のことができるということが本当に凄い（ありがたい）ことだと思った。実習へ行き、日常は当たり前に思っているものが実は凄く大切なことだと気付く、やはりコミュニケーションは日常でも大切にしないといけないと改めて思った。実習へ行き、対象は高齢者とか障害者になるが、対象者だけのためのコミュニケーションであってはいけないと思う。傾聴や共感というのは対象者のためというもあるが、普段このように会話をする中でも必要だと思う。そのような当たり前のことが、いかに大切かということが実習で思い知らされた。

メンバー C (精神障害者社会復帰施設)

メンバー D の話を聴くことや、自分の体験を振り返りながら思うことであるが、実習は一つの社会勉強だと思う。大学を卒業し社会に出て、歳をとり、人生を歩んでいく上で大切なことを学べる場所だと感じる。座る位置やコミュニケーションなど誰に対しても大切なことである意識を確認できる場所が実習であると感じた。多分そのことの大切さを意識できなかったら、人を大切にはできないと思う。実習は様々なことを意識できる場所、気づかされる場所の一つであると感じた。現場を見ることで自分の考えと照らし合わせたり、新たな自分に気づいたり、社会での礼儀の大切さを認識することができた。

メンバー D (精神障害者社会復帰施設)

実習先でも「コミュニケーションをとることは日常的なことでもある」みたいなこと言って

いた。しかし私は、実習へ行くまでは何をするにも特別なことだと思っていた。しなければならなかったり、思ってもいたけれど、でも実際に行ってみたらそれは特別なことではなくて、日常生活で普通に自分がやっていることと同じことなのに、それを自分で特別視していた。全然そんな大したことではなく、何も特別なことではなく当たり前のことをやればいいのに、無理に「やらなければならない、やらなければならない」という気持ちばかりになってしまっていたことに実習が終わった後になって気付いた。

メンバー C (精神障害者社会復帰施設)

そういうことや、位置とかもそうだけど、インフォーマルとかフォーマルとかの言葉を学び、特別ではないけれど、特別という意識的にも硬い感じで考えてしまっていたと思う。

メンバー D (精神障害者社会復帰施設)

「自分が特別、自分も特別」という思いがあり、「それも嫌だな」って実習に行ったら考えさせられた。勉強して色々な話を聞いても、まだそういう思いがある自分がある。前期の実習に行っても後期の実習に行ってもその思いは変わらない。

メンバー G (精神障害者社会復帰施設)

精神病というものがここへきて分からなくなった。「幻覚が見える。幻聴が聞こえます。」というのを言葉だけで表されても、自分には無いことだからイメージがわからない。そういうことを思ったときに頭に浮かんだのは、霊能力者とか「幽霊が見えます」という人たちのことだった。テレビに出てくるそうした人たちは何を発言しても、「病院に行かないといけない」とは言われないのに、何でこの人たち（精神病患者）はここにいて、働きに行けないのかと思った。「普通」というのは言葉が悪いけれど、実習先ではあまりに皆が普通で、誰が利用者で誰が職

員なのか最初判断がつかなかった。

印象に残ったのは、薬が入った袋を、「これは私の命の袋です」と言われたことである。薬がないと症状が出たりするので、「これは私にはなくてはならないもの」みたいなことを言われたときに、本当に言葉では表せないくらいに重いものがあつた。「体にとっての命ではなくて、心にとっての命の袋なのだろうな」と思った。「色々な経験をしながら人生を送ってこられたのだろう」とその一言で思った。このように正常と異常、治療の要・不要の線引きがどこにあるか分からなくなった。

メンバー A（精神科病院）

患者さんを薬漬けにしたらいけない。実習先で家族会へ行かせていただいたときに、薬の効果・副作用などの説明書きを2枚持っている方がいらっしまった。それを見て私は言葉が出なかった。その家族会には精神科病院の先生も出席されていて、その話を聴いて「あとで個別に話をしようね」と仰っていた。

患者さんを薬漬けにするのは如何なものかと思う。逆にそれがないと生きていけない体にされてしまっている。それにすがっていかないと生きていけないというのが、とても気の毒なことだと思う。誰か大切な人や居場所があるから、私たちは生きていける。患者さんは存在を認めてくれる人や居場所がないから、それ（薬）にすがりついてしまうと思う。薬が自分の居場所になってしまうのは勿体ない気がするし、人を薬漬けにして生かすことには強い憤りを感じる。

メンバー G（精神障害者社会復帰施設）

「一日の薬の量が20錠です」という利用者がいらっしまった。20錠の人が一番多くて、少ない人で一日1錠の利用者もいらっしまった。確かに薬は健康にはよくないと思うけれど、私たちは他人事だからそう思えるのだと思う。自分がいざ精神病になってみたら絶対に薬に頼ると思う。これがないと不安だと思う。だからあんま

り偉そうなことは言えないと思った。一面的なものだけで批判することは良くないと思う。

メンバー A（精神科病院）

薬の問題は当事者と非当事者の立場や視点が違うから、どっちがどっちとは（私たちは）簡単に言えない。

2) 将来の進路について

メンバー G（精神障害者社会復帰施設）

実習を行ったことで、自分の周りしか見えないくらい狭かった視野が広がり、周りの物事がよく見えるようになった。それができるようになったのは、実習中に自分の身を削って辛い闘病体験を話してくださった利用者のおかげであると思う。実習先でも色々な話を聴かせていただけなかったら、私は福祉職に就くことを諦めていたかもしれないのではないかと思う。だから、実習を行うことができてよかったと心から思える。「広がった視野を現場で活かしたい」という気持ちが強くなったので、私は福祉職に就きたいと思う。

メンバー B（身体障害者施設）

入学時（小学校から）に考えていた児童分野は捨てきれない。しかし、成人の分野にもチャレンジするつもり。できれば公立（公務員）が良いと思うが、そうでなくても良いところはあると思う。

メンバー D（精神障害者社会復帰施設）

実習へ行き、今まで狭い視野でしか物事を考えたり見てこなかったことに気づかされた。実習体験を通して、色々な視点から物事を見ることの大切さを学び、自分の中の視野が広がった。そのことで、周りを意識してみるようになった。また、相手に対して言葉を選び発言するようになった。このことは、実習へ行った自分自身の変化・成長だと思う。

しかし、精神障害者の方に対する障害への偏

見, 差別の思い, ひとくくりのイメージがすべて消えてなくなっているわけではない。そんな思いから, 100%完璧な気持ちで関わりを持ってない今の私には精神保健福祉士の仕事, 福祉職に就くことはできないという考えがある。今の自分の気持ちでは就きたいと思えないため, 福祉の現場以外の進路を考えている。

メンバー A (精神科病院)

周りを意識することはとても当たり前ではあるが, 実際には難しいことだ。そのことを実習体験で気づき, その大切さを学んだ。周囲を意識できることに関しては, 福祉のフィールドだけに限定される特別なことではなく, 日常のあらゆる場面で必要になってくる。私は, それを福祉のフィールドではなく, 老若男女誰もが住む地域生活の場で活かしていきたいと考えている。

メンバー E (高齢者施設)

前期実習が終わったとき, 福祉関係の職に就きたいと思っていた。しかし, 福祉関係の求人情報を見たときに, あまりに給料が少なかったもので, これでは自分ひとりで自立した生活をしていくには厳しいと考え, 福祉関係の職に就くことをやめようと思った。ただ, 今まで学んできたことや, 実習体験を通して得たことは, できるだけ最大限に活かしたいと思うし, 何らかの形に残したいと考えているので, 社会福祉士の資格を取ることはチャレンジするつもりだ。自分の将来の生活の安定を考えて, 今の時点では, 社会福祉士の資格をとり, 大学を卒業した後, 看護職の道に進むことを希望している。

メンバー F (精神科病院)

利用者と職員が互いに支えあう環境にあることに気づき, 自分自身をそうした場で生かして行きたいと感じた。だからこそ, 福祉現場へいき, 自分自身に磨きをかけ, さらに考えを深めていきたいと思っている。

メンバー C (精神障害者社会復帰施設)

実習により, 施設と地域との関係に関心を抱くようになった。人とのつながりや, 社会資源とのつながりを感じた中で, 「本当の幸せとは何か」について考えるようになった。

私は, 大学卒業後の進路として福祉職に就くことを考えている。地域やまちに根ざした仕事ができるような職場を考えている。

差別や区別をすることなく, みんなが一緒に笑顔絶やさず生きていけるような空間をつくりたい。一人ひとりの声に耳を傾け, その中で自分という人間も知っていきたい。さまざまな人たちとかわる中で, 自分自身の幸せとは何かを知り, 感じていきたい。

4

メンバー H (実習未体験)

私は, 今回このゼミ研究を通じて, たくさんのことを学ぶことができた。私ははじめ, 自分の意見を述べることに對して恥ずかしさがあり, 抵抗があったが, みんなで意見を交換したり, 話し合ったりする中で, 自分の思いを人に伝えることや人と関わることの重要性を知り, 学んだ。

そして, グループワークをしていく中で, 一つのことをみんなで互いに意見を出し合いながら, やり遂げることの難しさとやりがいを感じたため, 将来は人と関わる仕事に就きたいと考えることができた。とても良い体験であったと考える。

Ⅲ 結 論

1. ゼミ生による調査活動に対する考察

～共通項(学生自身の変化)に対する総括～

当たり前に日常生活を送る私たちが現場実習で変化・成長することができたのは, こうした環境に日々さらされている対象者と, 私たちの日常生活における状況があまりにかけ離れているからである。

これまで, 日々の生活が当たり前が続くこと

に私たちは何の疑問を抱くことも無く、さり気なく過ぎていく出来事にも、それが「当たり前である」という感覚でいることを、私たちは「それでよし」としてきた。様々なことを当たり前のこととして受け止めてしまう日常生活の中では、人として大切なことに気づくことができず、自分自身とじっくり向き合うこともしてこなかった。その必要性すら感じなかった。しかし、私たちの日常とは違う日常、すなわち社会福祉及び医療領域（保育領域を含む）の現場で実習を行ったことにより、私たちは自分達の日々の生活と実習現場を照らし合わせることができ、そこで初めて様々な違和感を感じ、目の前で展開される光景に疑問を抱き、私たち自身の行動・態度・発言に立ち止まり振り返ることを始めた。そして、次第に自分自身と向き合うようになってきた。

また、患者・利用者と実習を通して関わりを続ける中で、私たちの主観だけで物事を判断するのではなく、患者・利用者のこれまでの人生、気持ちや思いを彼らの事実として受け入れ、彼らの意思を吟味し、共感したことを返していく傾聴作業を試みてきた。それと同時に、自分自身及び相手を理解しようと考え、悩み、模索し、行動することにも臨み続けてきた。こうした作業を繰り返すことによって、私たちは現場実習に行く以前とは違う考え方、価値観を獲得し、結果として自分自身に大きな変化・成長を実感することができたといえる。

2. 担当教員による調査活動に対する考察

(1) 大学教育における社会福祉現場実習の位置づけ

本学科のような学問を展開している所では、ある意味現場実習に向けた準備を目的にして、専門領域を中心に学問を積み重ねているといっても過言ではない。本学科では保育士の資格取得コースも用意されているが、明らかに社会福祉現場実習がそれと異なるのは、学生たちが実習現場となる福祉領域に対しイメージをつけに

くい点にある。保育士や教師といった職業は、学生達の幼少期からの成長段階にかかわり続けた職業である。一方、相談援助業務を中核に添えるソーシャルワーカー（社会福祉士及び精神保健福祉士をまとめて表現する）は、大学教育で社会福祉を学ぶ中で初めて遭遇するといってもよい職業である。（家族を含む誰かが、生活上でその者の支援を必要とする状況に無い限り）したがって学生たちは、座学の中で福祉領域の現場の理解と共に、自らが資格取得をめざすソーシャルワーカーの役割や業務への理解を深めながら現場実習へ向けた準備を進めていくのである。

(2) 学生の立場としての現場実習の特異性と困難性

実習現場での生活の営みは、利用者たちにとっては当たり前のものであるが、実習という形で訪れた学生たちにとっては、今まで体験したことのない特異な空間に身を落としての生活ということになる。

特定の対象者が集められた福祉や医療の現場では、その利用対象者達が抱える生活課題や疾病、障害等の知識を学生として獲得しておくことはもちろんのこと、学生自らの中に存在する偏見や差別感情といった意識をモニターする自己覚知の作業も必要となる。

もちろんこうした専門知識的・自己意識的な課題だけではなく、現場実習という特別な体制が学生たちにとって初めての体験であるものも少なくないはずである。以下、一例を紹介する。

1) フォーマルな立場に基づかれた人間関係作り

学生たちは実習先での利用者と、一からの関係作りを求められる。気が合うとか合わないとかは関係ない。それがフォーマルな関係であり、どの利用者とも一様に必要な関係を築いていくことが専門的なかわかりともいえる。場合によっては利用者とのかわかりには、コミュニケーション上の技術の活用や工夫が必要となる

場合もある。今まで学生たちがインフォーマルな生活の中で活用してきたコミュニケーションの手段が、そのまま通用する場面ばかりでは無い。そのため学生たちにとっての戸惑いは大きい。

2) 評価される立場

学生たちは実習先での自らの実習態度を評価される立場にある。評価を行うためには、実習担当者は学生を始終観察する必要がある、そうした緊張状態に学生たちは大きなストレスを抱えることになる。

3) 存在意義の確認

養成校としてみれば現場実習の主役は学生ということになるが、実習先の機関としてみれば現場での主役はもちろん利用者である。学生は利用者の生活の一部を借りて専門職の養成に必要な体験をさせてもらっているだけのことである。こうした位置づけで実習を開始する学生たちにとって、現場において自らの立ち位置が定まらず、存在があいまいなままの状況が自尊心を低下させてしまうことも少なくない。それだけに利用者や施設スタッフが自分の存在の前に立ち止まってくれることがどれだけありがたいことかに気付かされるのである。

4) 意図的なかわり

福祉的支援は利用者との直接的なかわりをぬきには実施できない。そのかわりも単に利用者に接するだけでなく、目的や意図があって初めて専門的なかわりになることを学ぶ。日常生活において我々はあまり意識して意図的な発言をすることもないし、目的を明確にして行動することばかりではない。しかし現場実習においては、学生たちにこの意図的なかわりを求める。そのため、学生が利用者に対して行った言動の一つ一つの意味を、実習指導者と共に明確にしていく作業が求められるのである。「なぜそのような言葉をかけたのか」「そのときあなたはどう思ったのか」といった問いかけから、学生自身の言動一つ一つに意味を持たせ責任を感じさせていく作業に、学生は大きな負担感を

感じることになる。

上記のほかにも、現場実習のもつ特異性は存在するであろうが、学生の立場からすると未体験な環境下でかなり負荷の高い立場設定を用意され、精神的に追い込まれながらも、自身で考えられる限りのあらゆる力を駆使しながら乗り越えていく作業が現場実習には求められるのである。

(3) 特異性と困難性による恩恵

現場実習が特異な環境であればあるほど、学生たちに専門的な姿勢が求められ、学生達の人としての変化・成長は促され、結果として実生活にもフィードバックされていることがゼミ生達の報告により明らかとなっている。今までの生活において当然のこととして立ち止まろうともしなかった出来事を「ありがたい」と思う心。自分の存在を受け止めてくれる場所があることの幸せ。職業を持ってフォーマルな立場で利用者とかかわることの厳しさとやりがい(専門的価値)。

現場実習で様々な利用者の人生を自分たちなりに受け止めようとし続けた行為が、結果として学生たちに自身の人生を振り返る機会を与え、一人の人としての自分の過去・現在・未来を吟味させる作業を行わせているのである。

(4) 現場実習を体験することの真の価値

周知の通り、現在の社会福祉現場実習は、ソーシャルワーカーの育成という専門職性の面から見ると様々な課題を抱えている状況にある。例えば、ソーシャルワーク業務や支援展開に対する理解にまで及びにくいのが現場実習の現状である。要するにソーシャルワーカーが一体何者であるのかについては、実習を含む養成カリキュラム上のプログラムだけでは到底理解しにくい実情にある。この問題については、一連の資格法改正に基づかれる今後のカリキュラム見直しなどで改善が図られていくことに期待した

い。しかしこうした課題を抱えた現状の現場実習であっても、別の面から捉えるてみると評価は少し変わってくる。対人援助に求められる要素を、学生自身が利用者とのかかわりを中心とした実習体験から学び取り、自分達の日常生活を振り返る機会として位置づけ、自らの人生へ還元させようとしていることからみると、福祉学を学び現場実習を体験するという一連の作業は、ひとりの人としての学生達に大いなる価値をもたらしているといえはしないだろうか。

現場実習が必ずしもソーシャルワーカーの育成過程としてのものだけでなく、学生のアイデンティティの形成過程に大きく関与し、将来の進路選択の幅を広げる機会となっていること。あるいは等身大の自己と限界まで向かい合い、その結果として自らの資質や関心を実感した上で、福祉領域や一般企業をも含めた他領域への選択・決定を確信を持って行うことができるのは、まさに現場実習に真剣に臨んだことの恩恵であるといえる。

資格社会の中であって、現在の大学教育も出口（卒業時）でどのような手土産（資格）をもたせられるのがひとつの価値となってしまうのは事実である。現にそのつもりで本学へ入学している学生たちも多いはずである。社会福祉現場実習を行うことは専門職になるために必要なプロセスとして認識してきた学生たちが、現場実習を終え、ふたを開けてみれば、専門職に対する理解以前に一人の人としての自分自身に対する理解が及んでいなかったことに気付かされ、その作業の必要性を実感する。福祉を学び他者を支える立場にある自分たちが、なぜ自分自身のことを理解・受容しなければならないのか。入学当初から授業を通して学生たちに求められ続けてきた「自己覚知に向けた作業」の必要性をここへ来て始めて実感することになる。と同時に、このような自己へ向けた人間理解が、結果、専門職として向かい合う利用者に対する人間理解にもつながっていることを実感することになる。

(5) さ い ご に

一般的に昨今の若者達は他者との深いかかわりが苦手とされている。インターネットや携帯文化の熟成と共に、その機会自体もますます奪われてしまっている。そうした中であって、今回の調査実践活動の根幹には、この奪われてしまったとされる要素がゼミ生たちに求められたのである。具体的には、「他者とのかかわり」「実践の振り返り」についてである。まずは初回現場実習の中でそれは求められ、さらにはゼミ研究での作業において長期間それが求められ続けることとなった。

調査研究を行い、作品をゼロから生み出す作業は決して容易なことではない。ゼミ生たちによる本調査実践活動は、準備期間を合わせると1年3ヶ月にわたる。本論文の作成作業を加えると2年間にも及ぶ。この間に本作業が彼らの人間関係に何も影響を及ぼしていないといえは嘘になる。その内情はグループワーク的視点からみれば非常に貴重な研究素材になるが、本論文の趣旨から外れてしまうため今回は割愛させていただく。しかし、ただ一方的な経験が人を変化・成長させるものではないことは、ゼミ生たちは今回の作業で身を持って実感したことと思う。他者と懸命にかかわりを持つとする体験、そしてその行為を振り返り吟味していく機会があること。そこに自己を映しだす鏡となってくれる第三者が存在していること。このような要素が用意されて、初めて人は自らを振り返り、変化・成長を果たしていけるのである。本論グループディスカッションにあるようなゼミ生達の非常に率直で的を得た発言の数々は、ただ実習を行っただけで培われたものではなく、その後の本調査実践活動を通したゼミ生同士のかかわり合いの蓄積の中から生まれ出た成果であることを最後に付け加えて、本報告を終了する。

執 筆 担 当

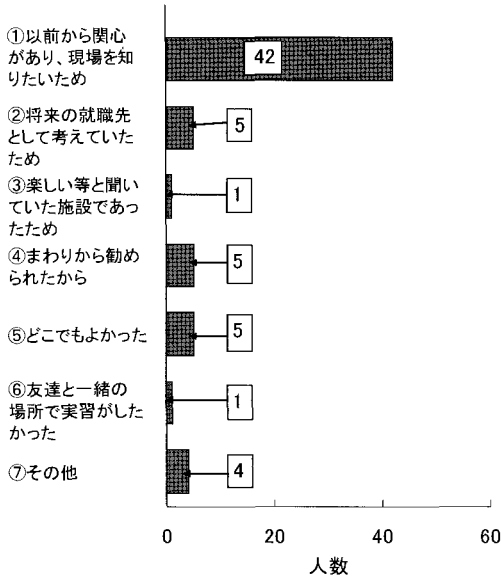
I 序 論 中村卓治

Ⅱ 本 論	ゼミ生
Ⅲ 結 論	ゼミ生・中村卓治
監 修	中村卓治

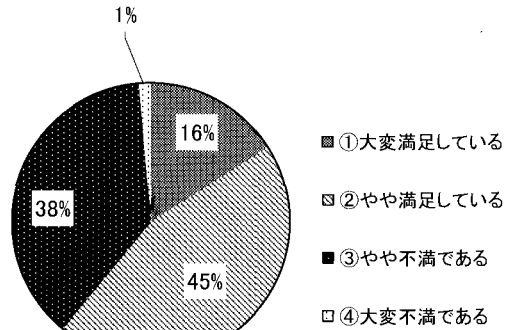
参考資料

(実施アンケートより一部抜粋)

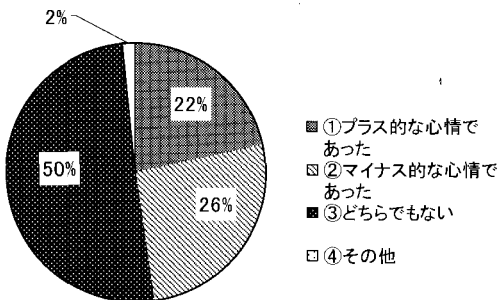
■ 2-5) その領域を選択した理由は何ですか



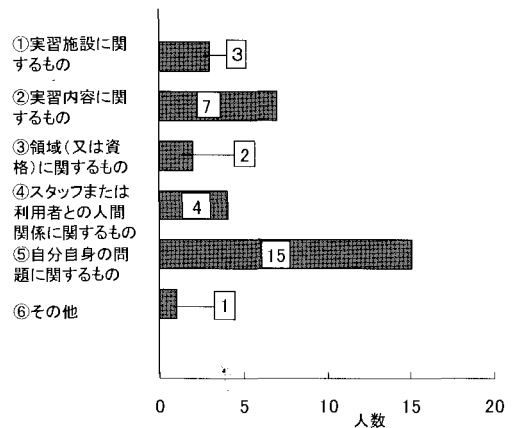
■ 3-7) 初めての实習は満足 of いくものでしたか (%)



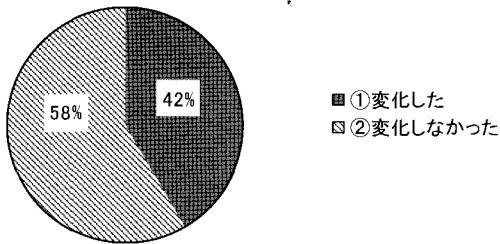
■ 2-6) 初めての实習に行くまでは、その領域に対しどのようなイメージを抱いていましたか (%)



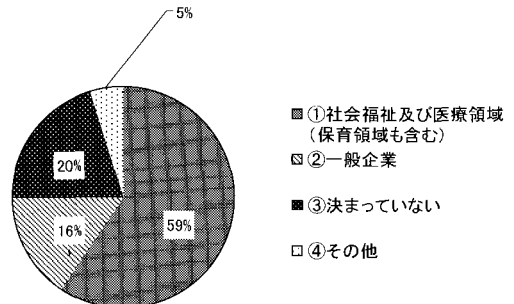
■ 3-8) 不満である方 (③④の方) の理由は何のようなものですか



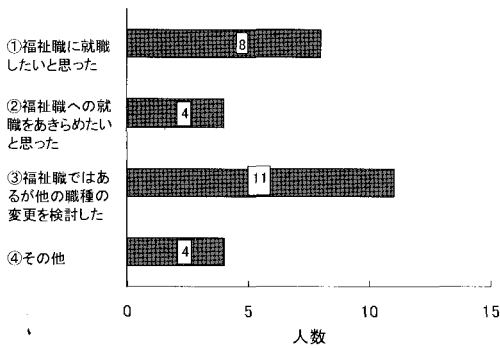
■ 3-9) 初めての实習(3年前期)を終えて、
進路に関する考えは変化しましたが
(%)



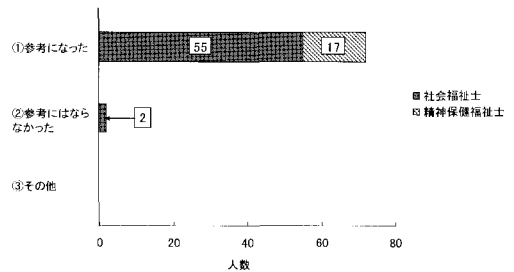
■ 4-12) いますべての実習を終えてみて、卒
業後の進路をどのようにお考えで
すか(%)



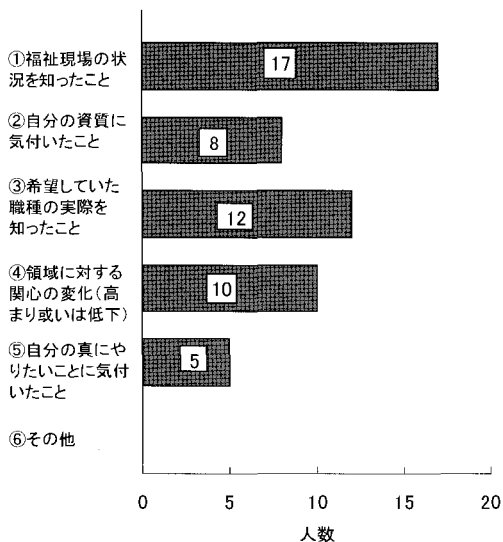
■ 3-10) 「変化した」と答えた方は、どのよう
に変わりましたか



■ 4-13) それぞれの資格における実習は、将
来の進路を決定する上で参考になっ
た経験でしたか



■ 3-11) その変化の要因はどのようなもので
すか



■ 4-14) それぞれの資格における実習は、自
分自身の人生において何らかの意味
を持つ経験でしたか

